

## 中国考古学事始

1991年に、中国社会科学院考古研究所との共同研究が始まりました。私はその第1回目の派遣として、先輩の深澤芳樹さんと中国を訪れました。当時は海外に仕事で行くことなどほとんどなく、初めての海外出張でした。期待と不安を胸に伊丹空港を飛び立ち、上海上空を経て北京空港に降り立ちました。2ヶ月間にわたり、多くの遺跡を訪れましたが、見るもの聞くものが全て新鮮です。今では考えられないことですが、当時は外国人が入れない「未開放区」がありました。河北省の磁州窯もそのひとつで、広大で残りの良い遺跡を目の当たりにするとともに、解放後初めて訪れた外国人として、地元の人に歓待を受けました。

1994年には漢魏洛陽城永寧寺、1997年は漢長安城桂宮の共同発掘に、現富山大学の次山淳さんとともに携わりました。この共同発掘にはその後多くの所員が参加し、唐長安城太液池や、漢魏洛陽城宮殿区の調査へと続いていきます。中国の研究者とともに日を過ごす中で、深い友情が育まれたと思います。

その後も訪中の機会があり、多くの遺跡を見ることができ、その規模と内容に圧倒されたものでした。日本の遺跡に慣れた身には、世界観が変わった、と言っても過言ではありません。その経験は、その後の調査研究において、大きな財産となりました。

現在、奈文研は多くの国と研究交流しています。考古研究所との交流が、初めての継続的な国際交流でした。その草創期に直接携わらせてもらうことができ、幸甚でした。今般、定年にあたり、そのことに感謝するとともに、国際交流の更なる発展と、奈文研の研究成果を多くの国に発信していけることを願っています。（都城発掘調査部長 玉田 芳英）



磁州窯での踏査の様子 1991年（筆者撮影）